

# 巣鴨分院の職業訓練と 藪入り会

櫻園通信 71 令和3年3月  
東京都健康長寿医療センター  
養育院・渋沢記念コーナー  
連絡先: 老年学情報センター

監修: 稲松孝思顧問医

作: 栄畑南美 (えばた なみ) 老年学情報センター



巣鴨分院 年長男子寮

養育院巣鴨分院は、1909（明治42）年に養育院から独立した孤児教育施設です。養育院本院では、入所人数の増加と、養育院にいる大人から子どもたちへの悪影響が懸念されていたため、巣鴨に子どもたちだけの施設が作られました。養育院の院長であった渋沢栄一も、巣鴨分院にほぼ毎月通っては孤児たちと交流していました。巣鴨分院は、1942（昭和17）年に現在の練馬区に移転し、名称も東京都石神井学園に変更され、児童養護施設として今に至っています。

巣鴨分院では、当時の小学校程度の教育を施していましたが、年長の男子・女子には社会へ出るための準備として職業訓練も行っていました。年長男子寮の中には印刷場があり、1925（大正14）年から職業訓練として印刷作業の実習を行っていました。

印刷作業の様子



ミシン裁縫を学ぶ様子

また、年長女子寮には炊事場があり、自炊の練習をして、家事ができるようにしていました。さらに、裁縫室とミシン裁縫室も設けられ、裁縫を習得できるようにしていました。

職業訓練を経て、巣鴨分院からはたくさん子どもたちが巣立っていきました。奉公先から奉公人が実家に帰ることのできる春と秋の藪入りには、巣鴨分院出身者も巣鴨分院に帰ってきて、院長の渋沢も出席し藪入り会が盛大に催されていたようです。

1930（昭和5）年9月の「東京市養育院月報」に、同年の藪入り会について記述した文章が残っていました。旧字を修正して裏面に引用します。

院外委託児童並出身者秋季躰入り会 院長登庁  
日なる九月十三日を選び、当分院においては院外  
委託児童並出身者の秋季躰入り会を挙行せり、会  
場に当てたる講堂及び食堂は、職員一同の手によ  
り前日までに美しく装飾せられたり、当日は夜来  
の豪雨全く晴れ渡り、絶好の躰入り日和となり、  
早朝より喜色を満面に湛えつつ三々五々打ち連れ  
来り、開会定刻の午前十時にはすでに数十名に達  
したり（中略）

この文からは、巣鴨分院の職員による出身者たちを迎えるための心尽くしの準備や、出身者たちの嬉し  
そうな様子がよく伝わってきますね。渋沢も笑顔で訓辞したようです。それにしても、88人も集まったと  
は盛大な会ですね。



出身者躰入り会と渋沢院長 （中略）渋沢院長も  
また出身者一同と親しく膝を交えて或いは訓話し、  
あるいは共に余興をご覧になるのを大変喜びとして  
おられた。（中略）写真はそうした記念撮影の一つ  
である。

院長登壇、温容に微笑みを湛えられつつ、諄々  
処世の要諦につき訓辞を与えられ、終わって校庭  
にて記念撮影をなし、食堂においては保母の手に  
なる特別献立の昼餐を饗し、午後再び余興を開き  
（中略）午後四時三十分盛会裏に散会したり。当  
日の来会者は男五十四人、女三十四人、計八十八  
人なりき。

（東京市養育院月報、第 350 号 p.15）

さて、この時撮影された巣鴨分院出身  
者と院長の渋沢栄一の記念写真が、「創  
立 60 周年記念写真帖」に残っていまし  
た。左が 1930（昭和 5）年 9 月の躰入  
り会の写真です。前列真ん中に座ってい  
るのが渋沢です。

「写真帖」にもこの写真の説明として  
躰入り会について記述があります。以下  
に引用します。

昭和五年九月、当時院長は九十一歳で尚矍鑠（か  
くしゃく）たるものがあつた。しかるに翌六年忽然  
として薨去（こうきょ）遊ばされようとは当時誰か  
よく予知し得たであろう。

（創立 60 周年記念写真帖）

上の写真の渋沢は、なんと 91 歳でした。亡くなる前年にも、巣鴨分院の躰入り会で  
出身者との交流を楽しんでいた渋沢栄一。まさに、児童福祉は渋沢が生涯を通じて携わ  
った福祉事業分野だったと言えるのではないのでしょうか。



【参考文献】

東京市養育院編（1930）『東京市養育院月報』第 350 号、東京市養育院。  
—————（1932）『創立 60 周年記念写真帖』—————。

